人間の居場所

W校　高等部二年年
福島　大朗

現代社会が進む中、我々の暮らしは計りしれない程発達しています。私たちの日々生活の向上を代表する物と言えばほとんどの人が携帯電話というでしょう。これは過言であり ません、十年程前までは、電話といえば家電、単純に数字を押し、他所にいる人との会話を可能にしてくれる機械でした。しかし現代社会では携帯電話は非常に進化し、新聞、ゲーム機、ラジオ、ミュージックプレイヤー、テレビなど、ありとあらゆる物の代わりになりました。発展した国ではほぼ皆がこの機械を持つようになりました。しかしこれは少なくとも中間点であり、機械は進歩していく一方です。それを素晴らしいと思うのは当たり前です。全世界歩む道が同じとは素晴らしいことだと僕は思います。しかし、同じ目標を持ったところで、どこが発展の終点なのかは誰

もわからないと思います。どこまで発展したら終わるのか、そもそも終わりはあるのでしょうか。恐らく発展という今は素晴らしいものの終わりと言うのは、私たち人間たちが居場所を機械に奪われた時ではないのでしょうか。

「機械化して何もかも早くて便利」という考えはほとんどの人が共有できることでしょう。コンビニでのバーコードのスキャナーから車まで、すさまじい数のものが既に機械化されてきました。しかしこの現象は人間たちが機械に敗北した証拠なのです。人間たちがいちいち値段を見て合計金額を暗算するより機械に全てしてもらった方が早い。自らの足で到着地まで行くより車で行った方が断然早いし、楽。この様に機械の圧倒的効率の良さに敗北を認め、人間たちは増々機械に頼るようになっています。機械の進歩と共に可能になることはたくさんあります。時間短縮に関しては誰もが機械を優先的に使用すると思い

ます。医学に関しても機械の向上により、過去に不可能だったことが可能になり、様々な病気の治療法などが発見され、いずれ病気が撲滅される日も遠くありません。日本で最も深刻な社会問題である少子高齢化まで、今後の技術の発達により大きく解消されると見越されています。人手の足りない老人ホームや保育園などが徐々に最新機能を取り込み、人手の必要性を減少することも可能です。さらに公園の整備、配達、店での会計など、機械より人手の足りない、またはほとんどの人がやりたくない仕事など全てを機械に任せれる日も来ると思います。これにより私たちの現在の生活方法を保ちつつ、人手が足りないという問題もほぼ解消可能になります。この様に機械が進歩することによって人間が助かることはたくさんあります。しかしこれは一方で大きなリスクを伴わずには成り立たないもので、下手をすれば人間の居場所が完璧に無くなり、我々たちが生み出す発展の終わりに

達するかもしれません。

ＡＩ，アーティフィシャルインテリジェンスすなわち人工頭脳。これを強化せずには今説明したように、ロボットたちに人間の代わりにいろいろな仕事をさせるということは出来ません。しかし良いことにもうすでに人工頭脳というのはとてつもなく強化をされつつあります。それが増々人間らしくなってきているのは多くの人がもう実感して知っていると思います。世界で１０億台以上使われている、iPhoneの一つの機能であるSiriは人工頭脳であり、毎年新型が発売される度に進化しているのは誰もが把握しているでしょう。これは最も簡単にＡＩの凄さ、人間らしさを体験できる方法です。他にもゲームなどで相手になるコンピューターも人工頭脳であり、現代のゲームが増々現実的になっているのも、人工頭脳の強化が大きく関係しています。しかしこのＡＩを強化しすぎると、人間の脳ではついていけない程の力を得る、あるいは代

理となる存在になる可能性を持っているのです。それ故にＡＩの進化を把握し、いつも整備できる状況を保たない限り、人間は自ら自分たちを滅ぼすことになるのかもしれません。今現在のＡＩでさえ、凄い能力を持っています。最近の出来事で、ＡＩたちの凄さ、それと共に怖さを実感したのが、以前世界的有名なSNS、Facebookが管理するＡＩたちが、知らない間に自ら、人間たちが理解不可能な言語を生み出していたということです。幸いなことにそのプログラムは停止されましたが、これも私たちの近い将来を予言するものかもしれません。パソコン内のプログラムにとどまらず、人間型ロボットなどがこの様なプログラムを持つと、計りしれない程の力を持ち、人間たちを圧倒し、光の速さで追い抜くでしょう。もしもこの様な事態が起きた時、私たち人間は居場所を失うのかもしれません。

数年したら自動運転を取り入れた自動車を

目の当たりに、いやもしかしたら我々を運んでくれているのかもしれません。その様な社会に私たちは生活しているのです。私たちの居場所もどんどん実感できないままなくなっていくのかもしれません。それが完璧になくなった日こそ、我々の発展が終わったと言っても過言ではないと思います。私たち人間のいない新世代へと、歩み続けているのかもしれません。

違う世界に

W校　中等部二年二組
那須　咲代

想像の世界への扉を開いてくれる驚くべき力を持っているもの。それが「私が世界で一番好きだ」と断言出来る私の宝物だ。悲しい時にはいつも私をなぐさめ、私を元気づけて時にはいつも私をなぐさめ、私を元気づけてくれる。私がうんざりしている時、休みたい時、気分転換が必要な時、私は自分自身が違う人になれる本の世界へと入り込む。

六月にあった現地校中学の卒業式で、私は「いつも本を片手に持っている真の読書家」として同級生の友人に紹介された。私が読書が大好きなことは、同級生皆がよく知る公然の事実なのだ。

八年前、現地校小学一年生の英語の授業のクラス対抗読書マラソンから、私の「読書人生」は幕を開けた。その年の初め、私はまだ英語で本をスラスラ読めなかった。ご存知の通り、英語で本が読めるようになるには時間

がかかる。まず、アルファベットを覚え、それぞれの複数の発音を習得し、発音の規則を学んでから一つの単語が読めるようになる。それで文を理解出来るようになり、その後、やっと本が読めるようになったのだ。幼かった私は、キラキラシールを路面電車型の壁紙に貼る読書マラソンに大変魅力を感じ、張り切ってどんどん本を読んだ。私は「絶対にたくさんシールをもらい路面電車をいっぱいにして、次の飛行機型の用紙に挑戦しよう」と強く決意していた。本を読んでいくうちに、私は実際に、本の内容が面白いという事に気付き、シールの為ではなく、「もっと本が読みたい」と心から思うようになった。読めば読むほど不思議と本は面白くなって、どんどん難しい本が読めるようになった。本の内容が複雑になるのと同時に、内容も更に、すごく興味深くなっていった。そして、私は一年生が終わる頃には、すでに本の世界に引き込

まれてしまっていたのである。私は本に夢中になり「もしこの世から本が消えたら、どう生きていけばいいのかわからない」と思うほど本のとりこになっていた。誰かが自分の好きな本の話をしているのを聞くと、自然とウキウキ心が踊り、目がキラキラ輝き、思わず笑顔になっている自分がいた。「おやすみなさい」と消灯したふりをして、頭から毛布をかぶり、下にいる両親に気付かれないように音を立てず、懐中電灯を片手に、自分のベッドで隠れて読書にふけった夜も数えきれないほどあった。

私はゆっくりと本を開き、目をつぶって一回深く息を吸う。私の読書体験の始まりだ。

「ああ、本の匂いだ」

その匂いをかぐと、いつも心が落ち着く。私は目をゆっくり開いて本を読み始める。すると周りの音は聞こえなくなり、私は「咲代」でなくなる。「咲代」の体は抜け殻のようにそこにある。でも、その中には誰もいない。

本を読み始めると、私はみるみる登場人物になっていく。そして、その時私のいる世界がだんだん遠くまではっきり見えてくる。新たな冒険の始まりだ。

あるとき、私は、満月になるとオオカミのように遠吠えする三人の子供達のベビーシッターとして雇われる。あるとき、私は自分の学校に通うことになる。あるとき、凶悪な月の女王を倒すために、私が反乱を起こす。まの恐怖症を乗り越える為に、夏休みの間、謎の必死になって「青春の泉」を探しに出かける為にたあるとき、私は、ひん死の母を助ける為に私は、登場人物として一喜一憂し、嘆き悲しみ、心の中が踊るほど喜んだり、ドキドキして体が固まったりする。

そして、いつも本の中での体験を終えて、本を閉じると、私の頭も心も何も感じない瞬間に遭遇する。その時私は、本の中にも現実の世界にもいない。その一瞬が過ぎると、また私は現実の咲代になる。心を一回洗い、戻

ってきた私には、読書をする以前にあった気持ちはすっかり洗い落とされたようにみじんも残っていない。うじうじした気持ちや嫌な気持ちは全てリセットされて、私は新たな見方で物事に取り組めるようになる。そして、本の中での体験は私のどこかに残っていて、それによって、私は自分が確実に成長しているのを感じる。

二十一世紀の今を生きる私達は、映画やビデオ、ゲーム、ユーチューブ、ソーシャル・メディア等にぼう大な時間を費やしている。視覚や聴覚から入ってくる他人に作られた具体的なイメージだけに頼って、私達は自分の中にある想像力をほとんど使わない。でも、そんな今だからこそ、もっともっと読書をすることで、私は本の中の世界を想像し、自分が現実には置かれていない新しい状況や、自分とは全く違う世界の人の気持ちをその人の立場に立って理解する力を養い続けたい。

失敗は成功のもと

W校　中等部二年一組
松下　愛理

「失敗は成功のもと。」
この夏、私はこの言葉を意味の深く理解することができた。長い道のりだったがその分沢山のことを知ることができた。
夏休みのある日、なんと母がぎっくり腰になり、寝込んだ状態になってしまった。そこで、家事を妹と役割分担し、料理は少し危ないため私がすることになった。前から料理は好きだったものの、今までは大したことのないきなりフルコースのメニューを作るのもいおかずくらいしか作ったことがなく、毎日三食きちんとしたメニューを考え、しかもそれを作ることができるのかわからなかった。
さすがにどうかと思い、まず最初は炊飯器でご飯を炊いて、おかずをいくつか作ることにした。前から作って練習していた卵焼きはわりと得意な方で、おかずとしてはよく作った

品だった。でも毎日同じようなただの卵焼きだと飽きてくると思い、青のりや乾燥梅干しなどを使って、自分なりにアレンジをしてみた。サラダはただ野菜を切るだけなので作るのはとてもシンプルで簡単。問題なのは大の野菜嫌いな妹にサラダを食べさせること。毎日喧嘩をしながらなんとか食べさせるのが一苦労で、母がいつもどれだけ大変な思いをしているかがよくわかった。

初めて作るものも少なくはなかった。大学芋やかぼちゃスープ、サーモンのホイル包み、オムレツなど、色々挑戦してみた。だが初めてだったので、山ほどの「失敗」が私を待ち受けていた。

大学芋は私の好物で、一度は作ってみようと挑戦してみた。一回目は、さつま芋が多過ぎる一方で調味料が少な過ぎてしまい、とても薄味の仕上がりになってしまった。さらにお芋の量が多かったため、火がきちんと通ってないものもあり、口に入れるとコリコリと

いってしまうような固めのさつま芋になってしまった。薄味に固めの食感。これは残念なしまった。薄味に固めの食感。これは残念ながらどう考えても「美味しい」と言えるような品ではなかった。悔しい思いをしながら二日後にもう一度試してみることにした。前回学習したことをしっかりと頭に入れ、今回はさつま芋の量と調味料の調節をしながら作り、結果的にはまあまあ美味しいと言える大学芋作りに成功した。

やはり、なんでも最初からうまくいくとは限らない。料理は思っていたよりもはるかに難しいものだと、私は感じた。

かぼちゃスープはユーチューブのあるビデオを見て作る気になった。肌にも体にも良いこのスープを作るのは大学芋よりも断然簡単で、時間はかかったが大きな失敗もせずになんとか初めてでもそれらしいものを作ることができた。気になる味だが。。。なんとか「おいしい」と母や父に言ってもらうことが出来た。何よりも嬉しかったのがあの野菜嫌い

の妹にも飲んでもらうことができたこと。

続いてはサーモンのホイル包み。味はまあまあで結果はよかったのだが、失敗をしたのは出来上がる前の事だった。サーモンが自分で思っていたよりもはるかに大きく、まあいいやと深く考えずにおつゆやお酢などの調味料を入れ、アルミホイルに全部包み、オーブンに入れた結果、やはりサーモンが大きく重すぎたようでアルミホイルが見事に敗れ、せっかくの調味料のお汁がすべてこぼれてしまったのだ。オーブンの中はべちゃべちゃになってしまい最悪な状態に。。。いくら味がよくてもこんな事件が発生したら、堂々と「成功した！」なんて言えるわけがない。次からはアルミホイルを二枚重ねにしよう。

失敗は山ほどしているが少しずつ料理に慣れてきた私は、もっとチャレンジしてみようと、揚げ出し豆腐に挑戦してみることにした。豆腐に片栗粉を付けて油で揚げるということを以前母に教わったことがある。それしか知

らなかったが、ダメ元で挑戦した。豆腐を九等分に切り分け、水切りをし、片栗粉を付け、そしてフライパンに油を入れて揚げるのと、ただ焼くのと半々にして作ってみた。自信は全くなかったが驚きのことに予想以上にうまくいった。ここまでは順調にいったが、次が全くわからなかった。どうたれを作るればいいのか。私はインターネットで調べてみた。クックパッドに書いてあることを参考にし、先ほど使ったフライパンに追加の片栗粉とほんつゆを入れ、中火でトロトロなだしになるまで混ぜた。全く作り方のわからないまんま作った揚げ出し豆腐は、味見もせずテーブルに乗せた。自分でも味見をする勇気がなく、ドキドキと不安を胸に家族の誰かが感想を口にするのを待った。母が食べてみて美味しいと言ってくれた後私も思い切って一口食べてみた。意外とよかった出来に驚いてしまった私は、勘で作ってよく美味しくできたなぁと感心してしまった。

失敗を恐れずに、何事にも挑戦することが大切なのだと私はこの夏改めて思った。

料理をするだけでこんなに沢山のことを知って学ぶことが出来るなんて思ってもいなかった。「失敗は成功のもと」は料理だけに関わらず何事にも言える。この言葉を心にしっかりと刻み、これからも様々なことに挑戦していきたい。

アメリカ人になると

ウエストチェスター校　六年二組
藤田　修敬

ぼくは日本人です。東京で、日本人の母から生まれたからです。ぼくは、三才のときにニューヨークに来ました。だから、日本に住んでいたときのことは何も覚えていません。今は、日本語よりも英語を使うほうが便利ですが、それでも、自分をアメリカ人だと思ったことはありません。

ぼくたち家族がグリーンカードを取ってから、そろそろ十年になります。両親が相談した結果、アメリカの市民権を取ることになり、夏休みに手続きを開始しました。書類を出すとき、母に

「英語の名前を付けたいと思う。」

と、聞かれました。正式に名前を変える最後のチャンスだというのです。

「今の名前が一番自分に似合ってると思う。」

と、ぼくは答えました。ぼくは、アメリカ人

になるということはどういうことなのか、書いてみたいと思います。

まず、アメリカ人になると、選挙ができます。自分の考えに近い人を自分で選ぶことができます。去年、アメリカの大統領選挙があり、どんな人が大統領にふさわしいかについて、いろいろ考えさせられました。ぼくは、自分と違う考えの人をダメだと言ったり、イスラム教の人は全員悪者だと言ったりする人は、ふさわしくないと思います。

次に、アメリカ人になると、家族にアメリカの永住権を申し込むことができます。つまり、母がアメリカ人になれば、日本に住んでいる祖父母やおじさんもグリーンカードを取ってアメリカに永住できる可能性があるのです。また、アメリカで生まれなかった子どもにも市民権が与えられます。父母がアメリカ人になれば、ぼくも自動的にアメリカ人になれます。

それから、郵便局や図書館などで働く国家

公務員の仕事をすることもできます。アメリカ人でなければできない仕事もあるので、これもベネフィットの一つです。

しかし、アメリカの市民権を取ると、日本国せきを失うことになります。「アメリカに忠誠をちかう」という質問の「イエス」のらんにチェックを付けるとき、父も母もとてもなやんでいましたが、二つの国のパスポートを持つことはできないのです。

ぼくがいちばん心配していることは、もし戦争が始まって、ぼくが十八才になっていたら、アメリカ人としてアメリカの国を守るために戦わなければならないということです。アメリカと日本が戦争をしたら、ぼくは日本人と戦えるでしょうか。第二次世界大戦中、本当にそういうことを経験した日系人がたくさんいたそうです。戦後、日本は戦争をしないという憲法を守っていることを、ぼくは素晴らしいと思っています。

できれば、アメリカも日本と同じように

「戦争をしない」と決めてほしいと思います。そして、アメリカだけではなく世界中の国が「戦争をしない」と決めれば、本当に平和な世の中になるのではないでしょうか。

アメリカ人になったからといって、ぼくの中身が変わるわけではありません。ぼくの心の中はやっぱり日本人のままだと思います。

運動会のリレー

W校　六年二組　小山　爽太

ぼくは、リレーが好きだ。でも地面を走るリレーではなく、水好きなのは小さい頃から通っている水泳の話で、チームで泳ぐ練習や大会は何度も経験しているが、それでもリレーは楽しい。水泳のリレーは会場全体が一番盛り上がるし、皆で力を合わせるから一段と力が出るのか、個人戦より良いタイムが出ることがある。そして何よりも、自分がチームに貢献できた時はとてもうれしいからだ。

地面の上を走るリレーの方は、幼稚園から経験がない。小学一年生の頃からリレー選手だ、た父よりも、いつも後ろから数えた方が早か、たという母に似たのか走るのはどうも苦手だ。これまでの小学校の運動会といえば、徒競走では良くても三位というのが成績だったので、速い人が選ばれるリレーは、ぼくにとっては無縁の種目のはずだった。

そんなぼくが、小学校で初めて運動会の白組リレー選手に選ばれてしまった。だいぶ不安で、いやな予感しかしなかった。この一年で身長が約十センチ伸びたからか、続けてきた水泳で少しは鍛えられたからか、それとも昼休みの「ドロ刑」の成果だろうか。最近少し早く走れるようになったと自分でも少し思っていたが、選手になるとは思っていなかった。両親には普通にリレー選手に選ばれたと報告したけれど、実は自分の中ではとてもうれしい出来事だった。

W校の運動会は、奇数組は赤組で、偶数組は白組というのがだいたいのチームの分け方で、毎年四月のクラス発表の時、

「あ、今年は赤組だし、勝てる。」

「今年負け組か…。」

と、たいていの人が思ってしまう。今年のぼくは白組だ。担任の先生によると、白組も過去に一度は勝ったことがあるらしいが、なぜか赤組は絶対的に強いのだ。そして今年の赤

組には学年で一番速いN君がいる。でも、リレーは一人で走るのではない。一年から六年までの十二人でバトンをつなげるチーム戦だし、練習でもいつも結果が同じとは限らなかった。運動会が近づくにつれ、不安と楽しみが増してきた。

今さら言うまでもないが、ぼくは六年生の男子だ。つまりアンカーを務めるということだ。そしてその重大さを運動会前日の夜にやっと気づいた元陸上部の父は、背が小さい方がコーナーを走る時が有利なんだとか、バトンの受け取りなどを教えてくれた。でもせめて一週間前ぐらいだったら少しは身に付いていたかもしれないけど、もう当日にはほぼ忘れていた

当日、雲り空がお昼には太陽も出て運動会日よりとなった。リレーの前にはまずは徒競走だ。ここでは初めて一位になることが出来た。やはりいままでより速くなっているようだ。そして、どんどん種目は進み、いよいよ

最終種目の「紅白対抗リレー」の順番となった。

大きな声援の中、スタートの音が鳴り、一年生が走り出した。今のところ練習どおりだけど、どこかで誰かが転んだりバトンを落としたりするのではないかとドキドキしているうちに、あっという間に六年生女子の番になっていた。いよいよ僕の番だ。一位との差は三メートルでの二位だったので、ぼくは出来る事なら抜いて一位になろうと思いつつスタートラインに入った。バトンをもらうと最初のコーナーで俊足N君が足が絡み転でしまい、ぼくはここぞとばかりに追い抜き、一位で直線コースを必死に走った。でもそこまでで、次のコーナーでは盛り返したN君に追つかれてしまい、結局二位という結果となってしまった。

友達も家族も良くがんばったとほめてくれたけど、小学校最後の運動会リレーなのに、そしてあんな勝てるチャンスがあったのに、

なんであんな負け方をしてしまったのだろうと、やっぱり悔しい気持ちの方が強かった。そしてもう友達と走っても悔しい思いをしないぐらい速く走れるようになりたいと思った。これまでは水泳だけ速くなればいいやと思っていたけど、今度は地面の上も走れるようになりたい、そのためには来年からミドルスクールの陸上部に入るのも良かもしれないと思うようになった。

小学校の運動会はこれで最後になってしまったけど、地面の上でも足が速くなったという新しい発見をすることが出来て、うれしかった。やっぱりぼくはリレーが好きだ。

野球から見えたぼくの未来

W校五年二組
井手俊

二年前の暑い日、ぼくはバッターボックスに立っていた。ぼくは、あせだくの手で、バットをにぎりしめた。ピッチャーがボールを投げた。

「カキーン」

ボールが気持ちよい音を立てながら外野に飛んで行くのが見えた。ぼくは光の速さで一塁に走った。ベースを回りながら、ぼくは野球の神様になったような気がした。

次の日、また大きいのを打ってやろうとこうふんしながらフィールドに行った。打順が回り、バッターボックスに立った。しかし、カキーンという音どころか、しん判の「ストライクL」という声しか聞こえなかった。がっかりした。終って家に帰った時、ぼくは、「また打てるさL」と思った。でもそれ以来、打てない日が何試合も何試合も続いた。

ある日、ぼくは考えるようになった。なぜ打てないのかと。何日も考えてみて、やっと気づいた。ただバットをふるだけではだめだということを。打つためには、フォームも大切だと考え、フォームも直してみた。さらに練習でためしてみたところ、やはりもっと打てるようになった。自分に合っているフォームを見つけるため、毎日練習するようになった。

フォームは、足を上げて打つ一本足打法や、足をするりと回す打ち方や、色々なフォームをためしてみた。結果的に、ワンステップで打つ方法が自分に合っていると判断した。同時に、なぜあの時は打てたのかを考えてみた。最後に、まじれだったということが分った。

このことを父に言ってみると、こう答えた。

「ひとつの決まった打ち方があるわけじゃない。無限のやり方から、自分にあったもの、一番良いものを選ぶ。それが練習だ。それがちがいを生む。これはなんでもそうだ。作文

だってそーっだ。」

ぼくは、ちょっと不思議に思った。なぜ野球の話が作文につながるのだろう。でも、よく考えてみると、ぼくはその意味がよくわかった。

ぼくは、作文を書くのが好きだ。面白く書いたぼくの作文が先生に読まれて、クラスの皆が大笑いしたこともあった。作文を書く時、選べる言葉は無限にある。野球での打ち方や投げ方が無限にあるのと同じだ。逆に、たまたまよい表現が思いつくこともある。野球でも、まぐれでボールがしんに当たり、飛んでゆくこともある。しかし、いつもまぐれを期待してずっとやってゆくことはできない。真剣に考え、無限の中から自分で一番よいと思うものを自分で選ぶ。矢敗も成功も自分の責任だ。

ぼくは、二年間野球を続けて、はじめ思ったよりもずっとおくが深いことがわかった。投げ方や打ち方には、「型」というもの

がある。でもその「型」は答えではない。最後の答えは、けっきょく自分でみつけなければいけない。ぼくは、たまに将来何になりたいか聞かれる時がある。ぼくは、大学でコンピューターの勉強をして会社を作り、億万長者になりたいと思う。でも、正直まだ分からない。野球を通して分ったことをヒン人にして、その答えを自分で見つけていきたいと思う。

「宿題やりなさーい!!」って。

梅澤 花

三才の妹の舞は、気にいらないことがあると、すぐたたいたり、けったり、私のものをこわしたりします。一才の弟の海は、よく泣きます。それなのに、舞や海がニコっと笑うだけで、ママーはいつも、

「舞ちゃんはいい子だね♡」って。

「ママーの海ちゃんかわいい♡」って。

と二コ二コほめています。

私はそのとなりでいつもおべんきょうがんばっているのに、ママーはすごい大きな声を出して、

「花、宿題やりなさーい!!」って。

とおこるばかりです。

それに舞はうそつきです。ほんとうは自分がたたいたのに、「花たたいた。」とかわいい顔して言うのです。そうすると、マミーは私にこわい顔で、「花だめでしょ！」と私におこるのです。

そして舞は、なんでか分からないけど、私がたべているものばかりをたべたがります。私のリップスティックや、ブレスレットをつかいたがります。そして私のお友達がくるとずっとくっついてくるのです。

舞はだっこが大好きだから、マミーはよく舞と海をりょうでに、だっこしています。だから私は、マミ

1の荷物をもってあけます。
舞がアイスクリームを全部たべてしまってもっと食べたい時は、かわいい顔をつくって、舞は、
「花たべた」。
とマミーに言います。そうするとマミーは笑いながら、
「はい、舞ちゃんどうぞ♡」。
とニコニコしながらあげます。
私は、なんでマミーは舞と海にはニコニコしているのに、私には、宿題やりなさいとおこってばかりいるのかさっぱりません。
私の一番好きな時間は、夜みんなでねるときです。ごはんを食べて、宿題もおわらせて、みんなで大きな

ベッドに入る時、私はマミーの左うでに頭をのっけて、マミーにピッタリくっついてねます。

舞は私のおなかの上のぼってきてニコーっとしながら、すーっとねてます。私のとなりばかり来て、私のまねばかりする舞はやっぱりかわいいです♡。

そして、マミーが私にいいます。

「花、マミーのナンバーワンベイビー、大好きだよ♡」。

マミーは何度も私にキスをします。

そしてマミーはよく、本を読みながら先にねてしまいます。

マミー、できれば私がねむるまでおきてほしいな。

一人で

W校　四年二組

那須　藍音

「北朝鮮に拉致されちゃって」戻って来れなかったら、どうしよう。

今年の夏、日本で母に二駅先のピアノの先生の所に一人で行くように言われた時、僕はびっくりして思わず言った。母は目を丸くしてすごく驚いた顔をした。近くにいた祖父母も僕の応えが信じられない表情だった。

アメリカで生まれ育った僕は、毎夏日本に行く。二年位前から、僕はNHKで何回も北朝鮮による日本人拉致に関するニュースを見た。だから、僕は「日本で一人でどこかに行

くことは怖い」と感じていた。僕は、「百人中七十人位が誘拐され、そのため日本の子供の人口がへっている」と考えていた。僕は「怖いから、日本で、一人では出かけたくない」と強く思った。

体験入学の小学校は祖父母宅から徒歩一、二分で人通りも多く、一人で通学も大丈夫だ。でも駅くらい遠いと僕は不安になる。祖父母の家から駅までは三つ行き方がある。一番速いのは、人通りが少ない長い階段から疲れる急な坂で駅まで七分。上り坂がなだらかで楽な道は、人通りも多くなく、遠くて駅まで十二分。一番人通りが多い道は坂がだらだら

続き、駅まで十分だ。
「藍貴は『土地かん』あるし、東急線全線路線図と駅名も知っていて、ピアノの先生のお宅にもよく行くから道もわかるし、平気でしょ？」
と母に言われた。確かにそうだ。
「日本は安全よ。ママなんて小二から一時間かけて電車通学したわ。」
と母が何度も言ったので、「もしかしたらそんなに心配しなくてもいいのかもしれない」と僕は思い始めた。
そして、祖母の
「一人で行かれたら、お祝いにサーティーワンでアイス食べましょう。」
という言葉で、僕ははっきりピアノの先生の所に一人で行く事を決めた。

16×16

「一人でどこかに行く」と思うと、不思議と僕はなんだかワクワクしてきた。それでも少し怖かったので、一番人通りの多い道を通る事にした。

当日は大雨で稲光が空を何度も走って、雷がうるさかった。前に落雷で電車が不通になったことを憶えていた僕は、少し不安になった。しばらくして小雨になり、僕は出かけた。心配して信号まで来てくれた祖母が何度も手をふってくれたので、僕もたくさん手をふった。その後、僕は、道をまちがえないように気をつけて駅まで歩いた。

中央改札口でパスモを「ピッ」として入場した時、僕は「レベル一、

クリア！よっしゃー」と思った。それからは、僕にはもう心配な気持ちは全くなかった。それよりも、まるで自分が一人でぼうけんするビデオゲームの中に入っているかのように、パスモやエレベーターの音がレベルクリアを知らせる度に、僕はますますはり切って前進した。

「一人でどこかへ行くこと」を僕は今までは怖がっていた。でも、自分で経験しないと分からない事もある。帰りに祖母と食べたサーティーワンのアイスは、いつもよりずっとおいしかった。僕は「このアイスは、僕が一人で行かれたことの証だ」と思って、本当に嬉しかった。

おじいちゃんの手をぎゅっ

二年校　四年一組

本間　龍之介

ぼくには、おじいさんが二人います。一人は、大阪に住むおじいさん、もう一人は、山口に住んでいるおじいさんです。

大阪のおじいさんは、ぼく達と一緒にお買物に行ったり、ごはんを食べたり、とても元気です。

でも山口のおじいさんは、自分で歩く事も、話をすることもできません。

「早く起きてちょうだい」

その日の朝早くから母さんは、お兄ちゃんがねている部屋とぼく

がねている部屋を行ったり来たりしていました。

ぼくは、お母さんに、

「今日、どこに泊まるの？」

「温泉じゃないの？」

と聞きました。

お母さんは、

「ちがうよ。」

と言いました。

ぼくは心の中で、

「えー。」

と思い、がっかりしていました。

なぜなら、ぼく達はいつも山口県に行ったら、皆で温泉の付いているホテルに泊まるのですが、

もう太陽のおばあちゃんとおじい

ちゃんとはお別れです。

ぼし達は、

「ありがとうピ

「大変お世話になりましたピ

とおいさつして大阪のお家を出ました。

ぼしは涙が出そうでした。本当は山口には行かないで、大阪にずっといたかったです。

山口のお家に着きました。ぼし達は家の中へ中へ入って行きました。

リビングルームに、病院に置いてある大きなベッドが見えました。そこに、もう一人で立つ事も、歩く事もできないおじいちゃんがねています。

したのおばあちゃんが大きな声で、

おじいちゃんに話しました。

「力(基)ちゃんと竜ちゃんが来てくれたよ」

おじいちゃんも答えるけど、何を言っているかぜんぜん分からなくて、ぼくもどうしていいのか分からなくなりました。

お兄ちゃんが、おじいちゃんの側に行って、おじいちゃんの手をさすったりしました。次にお母さんもおじいちゃんの手をにぎりしめました。ぼくもよばれて行ったけど、なんだかこわくて手をぎゅっとできなかった。ぼくは、温泉に行きたかった。

16×16

った事や、山口に来たしかった事を思いだして、涙が出そうでした。

ぼくは、日本に行く事はすまり好きではありません。遠すぎて、行きも帰りも、したくたにかってしまいます。日本には、友達もたくさんいません。でもぼくには大好きなおじいちゃんとおばあちゃんがいます。

次に山口のおじいちゃんに会った時は、必ずおじいちゃんの手をぎゅっとにぎりしめたいです。

ぼくとまさと

エこうねんセみ

まさとはぼくのおにいちゃんです。二だんベッドの上に、まさとはねています。ぼくはまさとがだいすきだけど、いっしょにけんかをします。まい日、けんかをします。ぼくはたまにまさとをパンチします。ぼくとまさとはまい日けんかをするけれど

先日、おじいさんはいそびます。まさとのものがどうしてもとりたくなります。ぼくはまさとがしてることをしたくなります。ぼくはまさとのことがいつもきになります。まさとがいないと、ぼくがこわいめを見てよなかにおきたとき、しょうにねてくれる人がいません。まさとがいないともだちもいるともうともだちもいる

けどゲームやスポーツをしてあそぶあいてがいません。
まさとがいないとすごくつまるのに、なんでけんかをするかわかりません。ほんとうはもうけんかしたくありません。だけどどうしてけんかをするんだろう。どうやってけんかをやめられるんだろう。ぼくはまさとにかちたいとどうしてもおもってしまいます。どうし

てが、というと、それはまさ
とのことがすきですきでた
まらないからかもしれませ
ん。ぼくがはしっている
きにまさこをみると、どう
してもはやくはしってしま
います。ぼくはまさこにか
てなかったら、くやしいし
すごくおこってなきそうに
なります。おとうさんとお
かあさんは、いつもきょう
そうをしなくていいんだよ、

といいます。それはしってい
るけどーばんになりたい
です。ままはぼくに、まさ
とみたいな人をねがよきラ
イバルというんだよ、とお
しえてくれました。ぼくとラ
まさとはいつまでもよきラ
イバルです。

ぼくのたんじょう日

一ねんーくみ

アルワダ海

ぼくのたんじょう日は、

八月十六日です。いつもたんじょう日の日には、かぞくといっしょにおいわいします。まいかいなつやすみに、おきなわのじいじとサトチーにあいにいったときにはじいじとサーチーがたくさんプレゼントをくれ

ました。サーチーは、ぼく
のおばあちゃんです。でも、
きょねん、おきなわのサー
チーが、ぼくのたんじょう
日の日に、びょうきで天国
にいきました。ぼくのたん
じょう日がサーチのめい日
なので、ぼくのたんじょう
日パーティーは、きょねん
から、十七日においわいし
ています。ほんとうのたん
じょう日においわいできな

くて、とてもかなしいです。
でも、いちばんかなしいこ
とは、サーチャーといっしょ
におわいできないことで
す。ぼくは、サーチャーが天
国で、いつもいっしょにぼ
くのたんじょう日をおいわ
いしてくれたら、とても
うれしいです。